

鎌倉における過去の津波到達地点

浪川幹夫*・平田恵美・辻亜紀(以上、鎌倉市教育委員会)・萬年一剛(神奈川県温泉地学研究所)

§1. はじめに

歴史時代に現れた津波のうち、鎌倉方面に襲来したのは、古文書や古記録などから、仁治地震(1241. 5. 15)、元禄関東地震(1703. 12. 31)、安政東海地震(1854. 12. 23)、大正関東地震(1923. 9. 1) 4地震のものと推定される。そして、津波を伴ったとして現在注目されている正応六年の地震(1293. 5. 20)と永享四年の地震(1432. 4. 12)については、津波の存在は定かでない[浪川(2015)]。

§2. 近世以前の津波到達地点

仁治地震は、『吾妻鏡』同二年四月三日条に「戊尅大地震。南風。由比浦大鳥居内拝殿 被引潮流失。著岸船十余艘破損」とある。同年この地震の前後には約7回地震があり、殊に同書二月八日条では「巳尅地震。昨日兩日之間。動揺五ヶ度也」と、2日程揺れが続いたことが窺える。なお、流失した「由比浦大鳥居内拝殿」は、「浜鳥居」か「由比若宮」所在の、いずれかの建物ではないかと思われる。

元禄関東地震では、『基熙公記』『祐之地震道記』等に、津波が二ノ鳥居まで達し、材木座の「荒井閻王寺」(円応寺)が流され、由比ガ浜一帯が被災したという記述が見えるほか、譜代大名内藤家の文書『江戸状之案詞』には、材木座光明寺の付近に漁船が打ち上げられたことなどが書かれている。

安政東海地震では、『巷街贅説』に金沢や鎌倉・江ノ島等で海岸筋が大津波に襲われたことが、そして三浦郡大田和村(現横須賀市大田和)の名主 浅葉家の『浜浅葉日記』に同村が浸水し、逗子桜山で由越川の橋が流されたことが記され、さらに古老の談によれば、鎌倉で稲瀬川と閻魔川(滑川)に津波が入り、下馬四つ角近くの「延明寺橋」まで浸水したと伝えられている。

§3. 近代の津波到達地点

大正関東地震における津波については、萬年他(2013)の論攷とともに、鎌倉市中央図書館が調査した旧町民や別荘所有者・居住政財界人・文学者等からの伝聞や体験談に基づいて、被災状況や到達地点を推定した。その結果、津波到達最奥部については殆どが川沿いにあることが判明した。当地内陸部への浸水は、河川遡上によるものと思われる。

§4. おわりに

中世の仁治地震の津波については、史料が少なく規模などが不正確なことは否めない。大正関東地震の場合は、記録のほか航空写真も存在するので、到達地点に関してはその精度は高いだろう。また、これら4地震の津波の到達最奥部については、それぞれの津波規模の差か、あるいは海岸線の位置や地形、河道の変化との関係が窺える。

文献

萬年一剛 五島朋子 浪川幹夫, 2013, 神奈川県逗子市 鎌倉市 藤沢市における 1923 年大正関東地震による津波～新資料と国土地理院 DEM に基づく再検討～, 歴史地震

浪川幹夫, 2015, 特別展 鎌倉震災史, 鎌倉国宝館

